

どうでもいい話

新谷恭明

二〇一七年一〇月一二日

いろいろ不調。このところ睡眠が不安定だ。昨夜は目が覚めて起きようとCPAPを切った
ら、まだ一時間半しか寝てなかった。長く寝てられない割に寝坊する。そして寝不足が溜まる。
そして午後のひととき、無性に眠くなる。本を読んでいて眠ってしまう。目覚めると頭がボー
ッとして仕事にならない。

それに加えて頭の切り替えが苦手なので、頭がしなければならぬ方向に向かない。しなくて
もいい方向に向かう。気分が乗ればそれにこしたことはないのだが、本を一冊読み終えたところ
で（これは今月いっぱいの仕事）、明日明後日の仕事が見つからずに残っている。なのにまた今
月いっぱい仕事にかかろうとして、これがまたうまく乗れない。

そこに来て中途半端な居眠りのツケである頭ボーッが行動を制御してくれる。困ったものだ。
苦茶をもう一杯飲むことにするが、ただの逃避でしかない。

このあたりの気分転換ができないのはほんと困った。スタンプを貼り付けたら文字がすべ
てセンター寄せになってしまった。よし、今日しなければならぬ仕事をす（「明日でき
る」という甘えがあることは確かだ。だから気乗りがしない。しかし、物理的には今日からし
ておかないとまずいだろう。）！ボールペンのインクの薄いのはなぜだ。それが気になって仕
方がない。ともかく明日できることを今からやろう。来週までにしなくてはいけないこともあ
るのだから。嗚呼！

二〇一七年一〇月一四日

昨夜というか深夜、石原裕次郎・芦川いづみ主演『あいつと私』のDVDを見てしまった。芦川いづみはめっちゃ可愛いのだが、ちょうど一九六〇年六月一五日に仲間の結婚式があり、その帰途にデモに参加したり、男友達に乱暴されたり、当時の学生文化がおもしろく描かれている。原作は石坂洋次郎で、週刊読賣に連載されていたものらしい。

劇中にも「安保反対！」など叫ぶ場面もしばしば登場するが、微妙に大学が政治から浮いている観は否めない。それは原作（読んでないのでなんとも言えないが）の問題なのか、石原裕次郎を使った青春物の限界なのか、どうでもいいことだが、当時の政権の姿勢を批判する用語が台詞の中で頻繁に登場する。今よりも（安倍君の）おじいちゃんの時代は言論の自由は存在していたような気がする。

今ならあの小児病宰相が

「こんな人たちには負けられません！」

「選挙妨害だ！」

などと言うにちがいない。

ということで、楽しい夜を過ごした。

二〇一七年一〇月一七日

本日は研修日なので、期日前投票に行きました。もちろん勤務時間前ということなので駆け込んだら、まだ開場していなかった。八時半始まりだとは思っていなかった。五分ほど待つことになってしまったが、先に四人ほど待っていた。やがて係員が、

「時間になったら、先着順にまず4人お願いします」

と言って、1番から順番を確認した。なんと5番であった。

で、時間（市役所の始業時間であったので始業のチャイムが鳴る）になったので1番の方が投票室に入ろうとしたら、止められた。なにかと思ったら室内から、声が聞こえる。要は「これから期日前投票が始まるので、どうのこうの」という会場責任者による始業の挨拶であった。

ここで悩むのは八時三〇分開始というのは市役所の職員が始業の挨拶を始める時間なのか、有権者が投票行為を始める時間なのか、ということである。ややもすると職員の出勤時間になりかねないが、そこはしっかり、僕が到着したときには職員の方々は勤務時間以前なのに役目の場所に待機していた。ならば、鐘が鳴った瞬間に入場できるようにしてくれてもいいのではないか、と思った次第である。

どうでもいいことではあるが、いい勉強をした。

二〇一七年一〇月一七日

偶然というか、神の引き合わせというか。ちょっとした選択のずれがあったならばこれはな

かっただろう。

振り返れば昨日のこと。A教授からメールが入った。

へある件について打合せの会議を持ちたいが、火曜日の一時からかー八時からか。どっちがいい？

というものであった。火曜日は研修日なので基本は出勤しない日である。しかし、会議は断れない。

「どちらでもいいです」(選択①)

遠慮深い僕はそのように返信した。

そして昨日は忙しかった。一八時から会議が一つ入っていた。その会議にA教授は出席されていて、

「あの件だけど、一時ということで・・・」

「は、はい！」

ということになった。

夜になって、夜中になって、朝になった。そして、火曜日が来た。

会議は予定通りそそくさと終わり、科研費関係の書類提出をしようと思った(選択②)。部屋を出てエレベーターに乗ろうとしたら福祉学科のB准教授とすれ違った。

「おはようございます」

「こんにちは」

「ん？」

B准教授があっちへ行ったことは、C教授が来ているということだ。僕は踵を返して戻った(選択③)。

ドアの開いて、煽がれた空気が廊下を伝わって頬に伝わる。

「おはようございます」

と、B准教授の声が聞こえた。毎週火曜日は僕は研修日だが、C教授の講義日だ。C教授は元の大学での同僚で、すいぶんお世話になった方だ。今年から特別契約教員として来ていただいており、研究室は僕の研究室の斜め向かいだ。

駆けつけると、C教授がデスクに座り、B准教授と向き合っている。B准教授とC教授は太古にほぼ師弟関係であったので、講義に際して何かと世話をやいているのだ。で、僕も加わり、雑談に花を咲かせた。C教授の講義の時間が近づいたので、僕は辞去して、会計課に向かった。この時、ちよいと思つところがあつて、庶務課に立ち寄った(選択④)。庶務課のほうでも些細な事務確認があつて、会計課に向かった。書類を依頼して、今日は一件落着。

昼飯を食へ損なっているのだが、ここで、ふと思ひ立ったのが、先日DVDで見た「あいつと私」。その原作の石坂洋次郎の小説を読んでみようとかAmazonで調べたら一円だった。しかし、送料が二五七円ついてくる。Book-offならば一〇〇円で売ってるかも、と思

ったのが数日前だった。

「もしかしたら・・・」

大学を出ると、ハンドルを戸畑方面に向けて切った（選択⑤）。Book offでしばらく探すが、なんと、無い。石坂洋次郎は売っていないのだ。なるほど時代が過ぎたのを痛感した。

「さて、メシでも食うか」とBook offを出ようとした時、携帯電話を研究室に忘れたことに気づいた。どうしようか。走りながら悩み、少しためらったが、どうせ明日また来るのだから、いいか。ハンドルを右に切って帰ることにした。

腹が減った。道路の脇に大きな看板が立っている。

へ八幡ちゃんぽん 八幡駅から二七秒へ

いつも見ているのだが、いつも見過ごしていた。八幡駅といえば、帰りがけに通るアンダーパスの上にあったのは確か八幡駅だったな。

アンダーパスの手前で左に入り込み、少しくと果たして八幡駅の前に出た。二七秒から見えるところにあるに違いない。右折してロータリーに入りそろそろと進む。駅の上に駐車場があるみたいだが、無視して歩を進めると駅の脇の小道を入ったところになにかそれらしき店が見える。

「あれかも知れない」

右手に送迎用駐車場があった。二〇分無料というやつだ。こいつを使うことにした。そしてその「らしき店」に向かった（選択⑥）。確かに徒歩二七秒くらいのところだ。

へ名物ちゃんぽん・焼きそばへなどと書いてある。店の名はよくわからない。ともかく入ってちゃんぽんを注文した。

出てきたそれは細麺の蒸し麺で、野菜たっぷりのものである。旨い。申し分なく旨い。火傷に気をつけながらちゃんぽんを堪能し、シメにスープに酢を垂らして吞む。いい味だ。これがちゃんぽんの一番旨いまとめ方だということを多くの人は知らない。

で、店を出てちよいと先を見るとへ元祖肉ラーメンへという店がある。近寄ってみると（選択⑦）、閉店している。駐輪場を抜けてロータリーに出る。

「あっ！」

左手に、つまり車でロータリーに進入するために右折しようとしたその少し手前あたりにへ八幡ちゃんぽんへという看板が見えるではないか。

「こっちだったか。」

近づいてみることにした（選択⑧）。なにか細かい事柄が店の入り口あたりに書いてあるし、きちんと確かめたいので車道を渡って店の前まで行ってみた。もう一杯食うというのはやめよう（選択⑨）。ということで駐車場に向かおうとした時に横断歩道を駅のほうから、つまりさっき僕が渡ってきた道を渡ってくる人物が眼に入った。そしてなぜか注視した。向こうも不思議

議そうなまなざしから確信を持った表情に変わり、手を挙げた。

かつて文書館やら百年史やらでお世話になったD氏だ。D氏は若いが非常に有能な人物で、百年史の仕上げのために手伝って貰っていた人物だ。

「ど、どうしてここに？」

「この時間は九国大で講義があるので」

「へええ、そうなんだ」

「で、ここで何をしていますのですか？たしか期日前投票に行ったはずでは？」

「あっ、それは今朝のことで、ちよいと会議があって帰り道で、そのあの」

意味も無くしどろもどろになりつつ、「みなさんよろしく」なんて愛想を言って別れた。別れて気づいたのだが、百年史は終わったはずで、だとしたら彼は「みなさん」にはそう会わなくなっているのではないか。いや、まだ事後処理があるのかも、などというわけのわからぬことが頭の中をぐるぐる回った。

「まあいい。要は福岡は狭いのだ」

そう呟いて、車を出した。料金所で駐車券を機械に挿入する。なんと一〇〇円と出た。二〇分を超えてしまっていたのだ。D氏との立ち話が一〇〇円としてカウントされたということになる。

いずれにせよ、ちょっとした選択によって稼がれた時間と判断がD氏との何年かぶりの出会

いという偶然を引き寄せたのである。選択肢が一つ違っていればこの出会いは無かったし、なにか一つ、一呼吸のタイミングのずれがあっても我々は会うことなくすれ違っていたにちがいない。いや、その時はすれ違ったこと自体に気がついてはいなかったのだと思うと人の世の不思議さに一瞬一瞬の大切さを噛み締めざるを得ない。

二〇一七年一月六日

気分が悪い。なぜ気分が悪いのかというと、講義の下準備に「愛国行進曲」をyoutubeで聞いた。

<https://www.youtube.com/watch?v=2CpztEOSrs>

そして、その書き込みを見たのだが、何がいいのか無条件に感動している若者たちや、それを煽っている大人たちもいる。問題は彼らがこの曲を曲解し、無前提にサヨク教師を嫌悪している点だ。曲解は例えば「八紘一宇」とは、全人類の平等を謳った言葉」だといったような解釈である。そのような解釈に共鳴する人たちをいわゆる「サヨク」と決めつけているにもかかわらず、である。教育勅語を道義国家云々と誤読した（させた）人たちと同じだ。

同時に彼らの発言の中に差別発言が混じり、レイシズムが登場してくる。彼らは自分たちを「ネトウヨ」とレッテル貼りをされることに不快感を示している。それはそうだろう。彼らを「ネトウヨ」とレッテル貼りし、彼らに「サヨク」とレッテル貼りをさせ、肝腎の理念的な部分についてはなんの理解もしようとはしない。

そういう風潮に気分が悪くなってきたわけだ。まさに胃の腑のあたりに重いものを感じる。どうも精神的にも不調なのは、先週の講義できちんと教育勅語を紹介したにもかかわらず、学生諸君は内容を理解しようとはしていないという事実から来ているのかもしれない。教育勅語がその後の教育課程に与えた影響を書くように課題を出したのだが、ほとんどの学生が内容には触れず、「道徳を学ぶようになった」とか「教育勅語に従って教育課程を構成するようになった」というような形式面だけを書いてくる。

問題に対してかわりを避ける傾向があるのかもしれないし、思考を深める作業が苦手なのかもしれない。そしてこの学生たちが教育勅語の内容に対してどう思っているのかがまったくつかめないことが僕の不安をかき立てているようだ。教育勅語に対してどういう考えを持つかはそれぞれの思想性による。シンパシィを感じるならそれでもいいと思うが、ほんとうに正しく理解してことであってほしい。しかし、現実の若者たちの生き方と、殊にあの「愛国行進曲」にラブコールを書き込んでいる人たちの態度と教育勅語や愛国行進曲の内容の落差が気になるのだ。

「愛国行進曲」が引用されている「ヨイコードモ」という絵本に描かれた良い子ども像とは異なるお行儀の悪さを感じるからである。もちろん教育勅語の時代もその理想のようにではなく、天皇の言うことも聞かぬ不忠者が戦争を引き起こし、不屈きな乱暴狼藉を働いた。残念なことに戦後のある種の「愛国者」たちがそうした罪を消してまわらなければならぬほどに、だ。

真の愛国者ならば、かつての過ちから学ぶことが必要だろうが、過去の過ちをなかったことにし、過去に過ちを犯した人たちと同じように粗暴に振る舞う。そうした風潮が草の根で広がっているのが気持ち悪いのだ。

天皇礼賛者ではないが、古来より天皇は民の安寧を願ってきたことは嘘ではない。そのあり方にいろいろあったにしてもだ。

だから思うのだ。

「陛下はそれをお望みになりますか」と。

二〇一七年十一月一日

今日はおかしい。まず医者に行こうと思ったら臨時休業。休呆堂で仕事をしていたら窓のカーテンの裏（窓とカーテンの間）にこそごとと動くものがいた。かなり大きいバッタみたいなやつだ。どこから入ったのだろう。窓の鍵（かかっている）を外し、カーテンごと外に追い出した（つもりだ）。外に出た実感はないが、室内からは気配は消えている。問題は何日も窓を開けていないのに突然窓とカーテンの間にそいつが出現したのかだ。

ともかくそいつを追いついて数秒後のこと足の親指にすんという痛みを感じた。なにか違和感がある痛みだ。指先に小さなガラスの欠けた粉でもひつついたみたいな違和感だ。気になるので、見てみたら、何と使用済みのホチキスの針が親指のまん中に刺さっていた。ホチキスの針と言ってもふつつ使っているサイズではなく分厚い書類を閉じるふたまわりほどおおきな

針だ。抜こうと思ったが抜けない。そのままでは仕事にならないので、ままよとばかりに力を込めて抜いた。三冊くらいは刺さっていたのではないかと思われる。傷口は深いのだろうが小さいので、そのまま放置することにした。化膿しなければいいとは願っているが。

そう言えば、ちよいと封筒に書類を詰めて蓋をしようと小机、といっても昔、福岡に来たばかりの頃に、まだ小さかった子どもたちに机代わりに抽斗のついた小さなラックの上に板を載っただけのものだが、その小机の抽斗に糊はないかと引き出そうとしたが空かない。どうやら中に入っている何かがか引っかかって出てこないのだろう。中には古い手帳類が詰まっていた、その中の一つがふくれあがって出るときの邪魔をしているようだ。

悪戦苦闘してなんとか引き出すとおもしろいモノが出てきた。古い手帳とかノートとかだ。それに今は日本の業界トップにおられる方からの書簡とか、その筋の大先生の書簡なんかも出てきた。古いものは奨学生手帳とか、福岡に引っ越してきた直後の日記まである。

二〇一七年一月一七日

なかなか集中力が続かないし、進まないの、愚痴を。

前回の講義で抜き打ち中間テストを行った。と言っても、ノートや配付した資料を見てもいいし、お友だちと議論してもいいというもので、これまでの学修の振り返りという要素が強い。注意事項として①基礎的な知識を正確に理解しているか ②用語や事象の持っている特徴、問題点などを指摘できるか ③自分の意見を持っているか ④自分のいいことをわかりやす

く説明できているか ⑤教育に対する課題意識はあるか ⑥仲間と議論をしたか という「評価のポイント」を示した。

このテストでは自己採点をさせたが、それに際して簡易な評価基準を配布した。

S…用語や事象についての独自の意見に強い説得力がある。

A…用語や事象について、自分の意見を付け加えることができる。

B…用語や事象について、特徴や問題点を説明できる。

C…用語や事象について、簡単な説明ができる。

F…その用語や事象について説明できない。

しかし、だ。Cにとどまる答案が圧倒的になった。つまりなにがしかの「正解」を書こうとしたわけだ。だからたとえば「課程主義」と「年齢主義」について説明せよ、という問題に対してまったく反対の答えが書かれてくる例が多かった。ここでは「課程」「年齢」という言葉の意味を考えることなく、答えらしきものをノートから転写しているようなのだ。だから仲間との議論はしていないということになる。

「どっちだっけ？」というやりとりはあったにしても、

「なぜなんだ？」という対話はなかったことを示している。

もう一つの問題。自己採点させると、正直に基準にしたがって自己評価している者は多い。「基準と照らし合わせたら、Cしかつけないじゃん」という感じだ。しかし、にもかかわらず、問題なのは自分の意見をまったく書いていなくてもAだのBだのを付けてくるのがいることだ。中にはSを付けているのもいた。点数とか評価というものについて染みついた感覚なのだろう。一つは「点数がよければいい」というもの、もう一つは基準を示しても基準を見ようとはしていないでともかく点数に置き換えてしまう感覚だ。

こういうのを延々と採点している。ハ〇人弱の答案なのだが、一体何時間かかるのだろう。集中力が続かないし、なかなか進まない。

二〇一七年一月二七日

今朝から、研究室のパソコンが不調。というより、いろいろ、作業してたらガクンガクン言い出して、で、なんとか処理していたら、マウスが動かなくなった。やはり、百均のマウスではタフな使用には耐え得ないのであろうか。

で、陰鬱な気持ちを抱えながら、近所を探してみようと外に出た。大学裏の坂道を降り、交差点をやり過ごしてしばらく歩くと脇道に蕎麦屋の提灯と幟を見つけた。一時を過ぎたばかりだが、提灯も幟も出ているので、ままよと戸を開けてみた。そこはL字のカウンターのみの店で、爺さんがひとり新聞を読んでいた。

「開いてますか」

店主とおぼしきその老人に聞くと

「うむ」と頷く。カウンターに載っているメニューを一瞥し、大ざるを所望した。

L字の内側は正方形の調理場であり、大きな冷蔵庫が二つ右手に見える。中央には調理台のようなものが見えるがいろいろモノが置いてあって確認しにくい。左側、つまりL字の棒の裏側には水道があるようだ。

老店主はカウンターの中に入ると冷蔵庫から新聞紙に包んだものをものを取り出し、物色した。蕎麦のようである。それを手で梳くように持ち上げて、なにやら観察するとまた新聞紙で包み直して、ポイツと冷蔵庫の脇のほうに放り込んだ。その放り込まれた先はカウンターが邪魔して見えない。だからなぜぼいっとしたのかはわからない。

そして再び、冷蔵庫から新聞紙の包みを取り出し、やはりこそごとと中身を確認していたが今度は店主の身体が邪魔して何をしてあるかが見えない。見えないが、包みの中身を調べていることは確かだ。その確認がすむと老店主はその包みを別の冷蔵庫にしまい込み、再び先の冷蔵庫を空けて、またまた新聞紙の包みを取り出した。中身はやはり蕎麦である。それをほぐすように持ち上げ、なにか異物でも探すかのような感じで、一つ二つなにかを抜き取った。

一呼吸して棚の上から四角い盆を取り出し、棚から蕎麦猪口と小皿を出して、其の上に置いた。そして、再び先の冷蔵庫をあけて、飲み物用のタッパーウェアを取り出した。底の方に黒

っぽい液体が入っている。蓋を外して鼻を近づけ、クンクンと嗅ぐようなそぶりをしてちょっと首を傾げる。が、躊躇いはその一瞬だけでその液体を猪口に注ぐ。液体がすべて注がれると空になったタッパーウェアを流しに放り込み水道をひねって水をその口に流し込む。シヨボシヨボと蛇口から容器に水が注がれる音を放置したままもう一つの冷蔵後から今度はたっぷりと黒っぽい液体の入ったタッパーウェアを取り出し、蕎麦猪口に継ぎ足すと、そのタッパーウェアを先の冷蔵庫の方にしまう。

次にどこから出てきたものか用意されていた刻みネギを小皿に載せると、なにやら古い茶色っぽい缶の蓋をスプーンの端でこじあげ。中からなにかをそのスプーンですくいだし、もう一つの猪口に入れた。二度三度、その作業をするや、やや急ぎ気味に水道に飛びつき水流を絞ってその猪口に入れるやスプーンの柄でかき混ぜ始めた。かき混ぜる速度が早い。その速さが気になるようでもう一度缶に戻って再びなにかを猪口に入れ、かき回す。今度は少し速度が落ちた。かき回すと言うより、練る感じになる。

「ああ、そうか」

昔を想い出した。どうやら練り山葵を作っていたのだ。老店主はその猪口を持って先ほどの小皿にその製品をこすりつけ、薬味のセットを終えた。

そうしたところで、新聞紙に載せたままの蕎麦を僕の座っているカウンターに向かって持ってきた。

「おやおや、そのままではいだけません」

と思ったら、老店主は手前で立ち止まり僕と彼との間に手をさしのべた。湯気がわっとあがった。どうやらこちらに蕎麦を湯がく用意がしてあり、彼はその蓋を取ったのだということにちよっとだけ驚いた。なにしろその瞬間までこの店に火の気配は感じなかったからだ。

蕎麦を放り込むと彼は冷蔵庫に貼り付けてあったタイマーを二分四〇秒に合わせてボタンを押した。

残り一〇秒を切ったところで老店主は箸を手にし、タイマーの鳴るや、蕎麦を引き上げ、ザブザブと洗い、準備したせいろに載せ、大きな缶の中からちままと刻み海苔を取り出して蕎麦の頂上にあしらった。そのままカウンター越しに渡してくれるのかと思いきや、調理場を出てし字のてっぺんから右下の終点までカウンター沿いに蕎麦のセットを載せた盆を運んできてくれた。僕の前に盆を置くと、

「つゆが足らんときは言うてくれない」と耳元で囁いた。

で、蕎麦を箸先でつまみ、持ち上げるとけっこうなコシと艶やかさが感じられる。悪くはない。それを猪口のそばつゆにつけようとしたが、なんとつゆはたっぷりと入っていてたっぷり浸けたらアルキメデスの原理でつゆが溢れ出てしまう。なので、ふたたび蕎麦を持ち替えてつゆに浸した。江戸前の粋な食い方はちょっとだけ蕎麦の端をつけて啜るものようだが、これ

だけつゆを入れてくれたのだから、つゆそのものも堪能させてもらわねばなるまい。麺にどっぶりつゆを浸し、絡ませて啜り上げた。

「おおっ！」

きっちり氷水で冷やしてあるのがわかる。思った以上に仕事は丁寧であった。だからなんだというわけではないが、手頃な店を一軒見つけたというところだ。今度は丼物を一つ頼んで並盛りのざるそばと合わせてみよう。店を出たらまだ昼前の小春日和が冷たくしめたざるそばの名残を温めてくれる。いい一日になりそうな予感がした。

二〇一七年二月八日

大分で独り酒。

明日から大分大学で集中講義なので、前泊。冬の大分駅前の電飾はこじんまりとしてかわいい。ホテルはアリストンといい、以前はワシントンであった。ワシンがアリスになったんだ。だから、ワシントン時代にも泊まっている。チェックインして、部屋に入ると「小物入れ」と記されたトレイが置いてある。見ると「朝食券」とある。確か朝食はつけたような記憶がある。なぜなら、東京のように立ち食い蕎麦を食べるチャンスは大分ではないからだ。なのに朝食券はもらわなかった。急きょパソコンを開き、予約の詳細を調べると、別途購入することになっていた。一二〇〇円か。よし、朝食を頼んでおくか。

と決意したところで夕食に出掛けることにした。出がけか帰りがけにフロントで頼めばいい。

まだ旅支度もほどこいていないので、そのまま出掛けることにした。エレベーターの中に「朝食券は前日までに買っておけばお得」と貼り紙があった。一〇五〇円。先ほどはチェックインは混んでいてしばし待つことになった。なので、夕食の帰りに立ち寄ろうと心に決め、エレベーターを降り、フロントを見ると空いていた。フロント係が手持ち無沙汰な様子である。なのに、朝食券は求めず、そのまま外に出た。

こういうことはしばしばある。AならB、CならDと行動計画を立てておきながらAなのにCと選択してしまう。人間というのは往々にしてそういうものではないのか。だからそんなとき、殺人事件にでも巻き込まれた日には、自分の行動に説明が付かない。

「どうして、刺さっていたナイフを抜いたんだ。その上、川に棄てるなんて、犯人しかないだろう。」

「い、いや、そんなつもりは・・・慌ててたもので」

「ふつうは、刺さっていたナイフは抜かない。抜いたナイフは川へは棄てない。証拠だからね。」

「い、いや、痛いだろうと思って。」

「誰が？」

「鈴木さんが・・・」

「この人が鈴木さんだというのか？」

「えっ、死んだ人が痛いわけじゃないでしょ。」

「だから、死んだということがどうしてわかったの？どうしてこの人が鈴木さんなの？」

「い、いや、息をしてないから・・・」

「確かめたんだ。鈴木さんかどうか、息をしてるかどうか。余裕だね。」

「い、いや、確かめてないっす・・・」

「ほら、おかしいだろう。やっぱり犯人はお前だ。」

「い、いや・・・」

ま、これ以上いくら続けても説明の付く話にはできないものだ。だからこういふときに事件に巻き込まれてはいけない。ともかく、朝食券のことは帰りがけということにして外に出た。ホテルの裏口から左側に歩く。かつてはこのあたりに出雲蕎麦の旨い店があった。大分ではシメに出雲蕎麦、というのが定番で深夜の蕎麦屋はいつも混み合っていた。しかし、今は大分の香兵衛はシメをどうしているのだろう。

その道が少し広めの道と交差する。躊躇いなく右に進んだ。そう、都町の中に深く進入しようとしているのだ。だが、探しているのは飲み屋ではない。ラーメン屋の類いだ。なにしろ今日は冷え込んでいる。そそくさと何かあった買い物でも食べて部屋でゆっくりしたい。そっちの気持ちが一番先である。

右に曲がってすぐに不思議な店を見つけた（写真）。ピリ辛の看板が眼にチラチラする。不思議な色合いの文字なのだ。

〈営業中〉

とあったのでガラガラと戸を引いた。想像以上にやたらと広々した感じの店内で、七時になったかならないかの時間なのだが、客は誰もいなかった。それでカウンターにすわったのだが、メニューもシンプルなので、この麺の辛さランクと数種類の餃子がメインのもので、詳しく見るつもりもなく、店主に注文をしたのだが、この店主、なかなか愛敬がある。

「この暖かい麺をください。」

「麺は暖かいのと冷たいのとがあるが、どっちにする？」

「あ、暖かいの。」

「辛さはこの三がキムチくらいね。」

「じゃ、5にしよう。」

「では3かい？」

「いや、5で。」

「5ね。」

「それと、餃子。」

餃子はいろいろ種類があったが店主は何も聞かず、メニューを閉じた。

そんなわけでピリ辛の五というランクになってしまった。七五〇円。6になると八五〇円だというので、初めての店に対する警戒心から五にした。蕎麦粉入りの韓国麺がゆったりと牛骨

出汁の中を泳ぎ、ニラと卵がふわふわと全体を包んでいる。ニンニクのかけらが時々顔を見せる。その合間にちらちら赤いものが見える。唐辛子だ。ずいぶん控えめな配分だ。辛さの尺度であるにもかかわらず、ひっそりと遠慮気味に卵とニラの間に浮かんでいる。お、この構造、何処が見たな。

そうだ、周船寺近くの前任校時代によく通った辛麺と同じではないか。あの辛麺は宮崎発であった。もとい料理としての出発は韓国なのだろうか。それとも宮崎なのか、はたまたこの大分のピリ辛亭なのだろうか。

辛さは、というと、ふつうのラーメンに胡椒をかけたくらいの辛さだ。スープの味が穏やかに伝わってくる。これが一般人の風味としての辛さを味わうという世界なのだろう。

それでも五には大辛の愛称が付いていた。さらにランクの上の方を見ると最高が二五で、「一〇分間で完食したら無料」とあった。思えば、辛麺屋では五〇くらいまでは到達し、三〇くらいで安定した辛さを楽しんでいた。ならば二五くらいは無理なくいけそうだ。次はそうしてみるか。しかし、旅先で只めしを喰おう、いや啜ろうというのは浅ましいことかも知れぬ。

酒は？いや、呑まなかった。注文を取りに来た店主が酒の注文なんて取るつもりはないと言わんばかりの勢いだったからだ。それとすっかり冷え込んで、ビールを頼む気にならなかったし、早く帰って温まりたかったということもある。

そういうわけで、温麺を堪能し、一口餃子（コメントしてなかったが、旨かった）をいただ

いた。一〇〇円。帰りがけに店主が声をかけてきた。

「ガムを食べて下さい。」

おお、ニンニクの効いたスープに対する配慮か。この店は絶対また来るぞ、と決意して店を出た。そして「コンビ二」に立ち寄り、おにぎりや即席の味噌汁と日本酒を買ってホテルに戻った。もう朝食券を買おうとは思っていなかった。こういうときに殺人事件には巻き込まれたくない。

「なんで朝食券を買わなかったのか？」

「いや、コンビ二のおにぎりで済ませよう・・・」

「朝食券を買うつもりで部屋を出たのだろう？」

「は、はい。でも気が変わって。」

「それはいつだ？ピリ辛屋で決めたのか。」

「は、そうかも・・・」

「嘘をつくんじゃない！フロントが空いていたのにやり過ごしたじゃないか。その時には買わないと決めていたのだろう。」

「い、いや、その時にはまだ・・・」

「じゃ、なぜ空いていたのにやり過ごしたのだ？」

「それは後で買おうかと・・・」

「おかしいね、空いているときにチャンスでしょ。なのにやり過ぎて五辛を嚙った。いつもなら一五以上は行くはずなのに何で五だった？そこからおかしい。」

「い、いや、・・・」

ともかく、こんなときに事件には巻き込まれないことだ。三〇〇mの日本酒の小瓶が空になった。さて、もう一本・・・大分の夜はそんなに長くない。

二〇一七年二月二日

このところFacebookを開いても、mixiを開いても、ブログを見ても、リュックの広告が出てくる。おそらく他の人がパソコンを開けてもそうはならないだろう。

どうやら、よさげなリュックの広告に見入って、値段なんか確かめた所為なのだろうと思う。もちろん、心の中に「欲しいな」という気持がないことはない。いや、あるといった方がいいだろう。

なぜならば、ちょっとした旅行の際にもシーパップという呼吸補助器を持ち歩かなくてはならない。そして重い荷物がきらいなので軽量なバッグでなければならない。以前は手提げの軽いバッグを愛用していたが、持ち歩くのが辛い。殊に夏は荷物を持つと汗をかく。なもんで、キャリーバッグが欲しかった。そこそこ前にはキャリーバッグを持っていたのだが、その頃はまだシーパップを持ち歩いてはいなかった。しかし、夏の暑い盛りに荷物を持つという作業からは解放されていた。しかし、これがほどなく壊れた。で、手提げに戻ったわけよ。そしてち

よいと前に思いついたのが、小さな飛行機にも持ち込めるのであれば、というので小さなキャリーバッグを買った。これがお気に入りです。で、キャリーバッグにはひとつ不満がある。それは荷物の出し入れがやっかいなことだ。

で、リュックはどうだろうかと言うことになったのだ。リュックについても、だ。僕は手提げ鞆派であったが、あるときふと思いつき、通勤用にリュックを愛用していたこともある。これは楽でよかった。しかし、そう大きな物は持ち歩けないし、本や書類などの重い物を詰めるにけっこう苦しくなる。でも、安物を何度も使い潰している。ていうか、まだ使えるのが数個、休呆堂には転がっている。

海外旅行にもシーパップは持って行くようにしているので、インド旅行の時も大きめのリュックにしのばせている。だから、リュックでも悪くないとは再び思い始めたのは、キャリーバッグは開け閉めがやっかいなのと、小さくてもかさばり感があるということだ。で、再びいいリュックはないかと思っていたところで、リュックの広告に眼が行ったということになる。

問題は、一度広告に関心を持って値段なんかを調べたりしたら、パソコンを開くたびその広告が現れることだ。おそらくそう長くないうちに僕はこのリュックを買ってしまいたいような気がする。そのくらい広告効果はあるのだ。しかし、もう一方で思うのは、僕のFacebookでの欲望がmixiにもあらわれ、ブログにも現れるのかということだ。ブログもし社、S社は登場せず、A社に登場する。どこかに情報交換のネットワークがあるらしい。

それは個人の欲望という情報までダダ漏れということではないか。このように個人の情報が好き勝手に業者間で使い回されているにもかかわらず、個人情報云々でSNSのマナーが取りざたされ、そのために学生指導なんかもオリエンテーションではなくてはならないし、研究に必要な情報は制限がかけられて見ることが難しくなり、どうでもいいだろうという情報まで使用に際してはチェックと許可が求められる。妙な世の中になったのだと思う。

二〇一七年十二月一日

疑いの気持は徐々に確信に向かいつつある。先日、東京である研究会があり、その後池袋の居酒屋で懇親会をした。その居酒屋だが、入ると靴を脱ぐ。店としてはその一団全員の靴を預かり、帰りには再び一団の靴を玄関先に並べてくれるというシステムだ。高級な店だと一人一人靴札をくれて管理してくれるのだが、そこまでは手は回らない。

懇親会は楽しく進んだ。途中、新幹線で帰る人、やや自宅が遠目の人などがポツポツと抜け、全体が終了したのが二一時になっていただろうか。そのあたりはよく覚えていない。

で、玄関先に靴が並べられた。僕のはR社の茶系の靴で、少々デザインが入っている。ずらりと並んだ靴の中からそれらしき物を探すと一足見つかった。しかし、微妙な違和感がある。靴というのは足に合わせてくれる部分がいくぶんある。なので履いているうちに見た目も少し個性は出てくるのではないかとちょっとは思う。そんなところに微妙な違和感を見たのだ。

しかし、わさわさとわが一団は外へ出ようとしているわけで、ためらってはられない。足を靴に挿入し、靴べらで押し込む。違和感が少し強くなった。足を包み込む感触がよそよそしいのだ。ここで、騒ぎ立てるのもいいのかもしれないが、そこは酔っている所為。

「こんなもんだろう」

と感覚を確かめる。大きさはピッタリなのだ。デザインにまちがいはない。

「なんか問題がありますか」

自分が自分に問いかけている。このところ足がむくむときがあり、違和感はそのせいかもしれないと自分を納得させ、外に出た。一団の足下を見て、同じR社を探したが、盛り場の夜の酔客の群れの靴を酔眼で確認するのは神でも無理だろう。そこは諦めて、帰途についた。その夜はホテルに泊まり、翌朝再び靴を履いた。また幾分の違和感を感じるが、前夜の酒の所為で足にむくみが来ているのだらうと、足に文句を言わず靴に押し込んで機上の人となった。

翌日は別の靴を履いた。

そして今日、再びその靴を履いて出勤した。違和感はまだ強く感じる。見ると、踵の減り方が妙だ。外側が余計に減っている。僕はこのまま不自然な歩き方はしない。

もしかするとこの靴は誰かがまちがえたか、僕が先んじて履いてしまった後から僕の靴が出されたか。そのあたりは日馬富士一件と同様、参加者全員の事情聴取を行わないと真偽の程はわからない。さらに一団はみな職場がちがう。あちらこちらに散ってしまっており、それぞれ

の日常へと回帰してしまっている。

だが、僕の中ですかすかな違和感は明らかに違和感へと成長し、ほぼこれは違ったのではないかと思いつつある。今日は致し方ないとしていつまでも他人の靴を履いているわけにも行かない。明日からは違う靴にしよう。

もし、僕と同じように違和感を感じている人と次に会ったときにその違和感について語り合い、交換して確かめ合う時間が持てればいいのだが、そんなときに訪れるだろうか。この一回の人たちと再び会う可能性は高い。しかし、この件について話し合うことはないように思える。

二〇一八年一月二二日

○大学での集中講義が終わった。最後の時間に試験をした。問題を黒板に書き、学生諸君はA3の解答题紙に書く。二枚目を書く学生もずいぶんいたから提出された解答紙はけっこうな分量になる。

それを抱えて教室を出た。学務課にあいさつに行く。K先生が学務課の職員の方に

「解答紙を入れる紙袋なんかありませんか」

職員の方は事務所の奥の方でもそもそ探してかわいらしい手提げの紙袋を取り出してきた。

「これはどなたかの私物じゃないんですか」

「いいえ、学務課で使うためにとってあるものです。気にせずにお持ち下さい。」

ということでA3の分厚い紙の束を二つ折りにして紙袋に押し込んだ。荷物がひとつ増えたわけだ。

K先生の車で大分駅まで送っていただく。車から降り、お気に入りのキャリーケースを後部座席から引き出す。小物の入ったバッグをだすき掛けにし、紙袋をキャリーケースの上に載せ、キャリーの伸ばした取っ手と紙袋の紐とを一緒に握りK先生にさよならを言って駅に入った。土産物を物色しようと思ったが、改札口の表示を見ると十分後に博多行きソニックがあるではないか。土産物は諦め、改札を抜け、ホームにのぼった。すでにソニックは停車しており、四号車に乗った。スマホの乗換案内でチェックすると小倉で各駅列車に乗り換えると一九時二七分に赤間に着くと出た。

ソニックが走り始める。ちょっと気になって、乗換案内を何度もチェックし直して確認していくとソニックは折尾まで行き、その次は香椎となる。つまりは折尾で乗り換えてもいいわけだ。なぜ乗換案内は折尾乗り換えではなく、小倉乗り換えなのだろうか。

さらに調べると、小倉で乗り換えると五分程度の待ち時間で各駅列車に乗れる。折尾まで行っても同じ各駅列車に乗ることになるのだが、そうすると折尾では一五分程待ち時間ができることになる。冬場でもあるし冬空で電車待ちするよりは成るべく車内にいる時間を多くしたいというのが、乗換案内の配慮なのだろう。

気持ちは小倉乗り換えに傾きつつあった。小倉では進行方向が逆になるので、座席を回転

させて方向転換しなくてはならない。小倉で降りればその作業は免除される。それも小倉乗換にしようと思った小さな理由でもあった。そして、詰め将棋の本にちよいと神経を集中させていたら突然小倉に着いた。ちょっと慌てたのか。席を立ったときにひとつ前の人が座席を回転させた。なぜか自分も自分の座っていた座席を回転させた。

「おっ、ちゃう。オレはここで降りるんだった」

しかし、降りるべき人は降りてしまっていたので、今や人が乗り込んでくる番になっていた。

「あわわ」

けっこう焦って、乗ってくる人の流れに抗いながらほうほうの体でソニックを降りた。で、「乗り換える電車はどっちないな」と見渡しても混乱してよくわからない。そうこうしていると五分鐘が短く思えてきた。

「ままよ」と再びソニックに乗り込む。五号車になった。デッキに五、六人立っている。混んでいるのだろうか。客室に入ると空いた席があるではないか。おそらく戸畑あたりで降りる人がデッキに残っているのだろう。ともかくその席に座った。なぜかちよいと尿意を催し始めた。乗り越しては大変なことになるので、黒崎を過ぎたところで席を立ち、デッキに出る。

デッキには僕だけだった。やはりみんな戸畑か黒崎で降りたのだろう。そうしてドアの硝子越しに夜景を見ていた。ふっと若い女性がデッキに現れた。ハッと驚くくらい目が大きくぱっちりとしていてかわいい女の子だ。二十歳前後だろう。

ぼっとしていたのだが、妙なことに気がついた。その娘はバッグをたすき掛けにしていた。黒っぽいキャリーケースを引きずり、土産物らしきものを入れた紙袋をキャリーケースに載けてハンドルのところで紙袋の紐を握っていたのだ。

「えっ?」

ソニックは折尾に着いた。娘と譲り合うようにしてソニックを降りた。折尾駅は改装中で、降りたところに下り階段が見える。しかし、その階段は見たことのない階段だ。しばしホームをうろうろしてから再び階段のところに戻るとそこに構内図が掲げられている。トイレを探すとその階段を取り敢えず降りたところのようだが、どのくらい降りていくのかわかりにくい。ともかく階段を降りることにした。降りるとなんと若松行きの電車が停まっている。すこし以前の駅の間を思い出した。トイレは程なく見つかった。用を足してから再び階段を上り、先ほど見た構内図を写真に撮り、Face bookに載せた。そこへ各駅停車の電車が入ってきた。空いている。列になって座る形式の客室だ。席三つのところで手すりパイプがついている。そこに、つまり端から三つ目の座席に座ってホッと息をついた。

そうしたらなんとあの娘が乗車してきたのだ。たすきにバッグをたすき掛けにし、キャリーケースと紙袋を持っている。そして彼女は車内を見渡すと僕の隣、といっても空いているので間の席を空けた一番端の席に座った。

僕はたすき掛けのバッグを膝に置き、手前にキャリーケースを置いて取っ手を引き出して紙

袋の紐をそれに絡ませるようにして座っている。その娘もバッグをたすき掛けにし、キャリーケースの取っ手は押し込んだまま上に紙袋を載せていた。思わず話しかけたくなるほど奇妙な取り合わせだ。もっともその娘は隣のジジイが自分と共通点を持っているとは思っていない、とは思う。黙々とスマホをいじっている。僕もスマホを出して遊んでいたが、気づくところかの駅に停車している。あわや、と立ち上がってドアに出てみると海老津だった。ほっと胸を撫で下ろし元の席に座り直した。ちよいとばつが悪い。

教育大前を過ぎ、再び僕は席を立った。赤間駅のホームに入る。その娘も立ち上がった。なんと彼女も赤間駅がゴールだったのだ。改札を出ると僕は南口のエレベーターの前に立った。先客が待っている。エレベーターが上がってきた。乗り込んで振り返ると先ほどの娘が階段のところでキャリーケースを持ち上げて降りようとしていた。彼女も南口なのであった。

休呆堂に立ち寄る。まさか・・・はもうなかった。

二〇一八年一月二六日

何か忘れていると思ったのが、先週のとある会合のこと。頼まれて、ある本の書評をするこ
とになったのだが、そのとき

へ以前決めていたはずの書評は何にするつもりだったんだっけ？

と自問した。特に約束したわけではないが、某誌には毎号だいたい二冊くらいの書評をするこ
とにはしている。で、女性の書いた素敵な本を一冊と、ある三巻まで出ている漫画本にターゲ

ットを決めた。そして、そのつもりで年末の長風呂はそれらの本を読むのに費やしていた。

その書名が脳裏からふっと消えていた。読んで、書評を書くまでの（すぐに書けばいいのに
締め切りギリギリまで手を付けない癖）数週間の間に記憶から消えていたのだ。

で、思いだそうとしたが、出て来ない。それが締め切り間際の昨日、一つ思い出した。三巻
まで出ているマンガなのだが、先に二巻、三巻を入手し一巻はだいぶ後から届いた。通販とい
うのはそういうこともあるのだ。なので、第一巻は後から読んだし、それは二階のベッドで読
んだことはまちがいないし、その後居間に降りてきて読んだ記憶もある。

で、まずは居間から探し始める。次いでベッドまわり、子どもが読んでいたから、彼らの部
屋、そう言えば娘も読んでいたから、娘の部屋も探す。浴室も見る。そのルーティンで何巡も
探し回ったが、見つからない。途中、もう一冊書評を書くと思っていた本が見つかった。し
かし、よしよしと言うには、

「休呆堂に持って行ってない？」

「そうかもしれない。探してみるよ」

と言って、とりあえず書評用の本を食卓の上に重ね、コーヒーを口にした。そうして先ほど二
巻と三巻が積んであった座卓の上を見ると似たような装丁の本が置いてある。

「ん？」

近寄ってみると、なんと第一巻ではないか。ぐるりとあたりを見回し、我が家の構造を振り

返ってみても、最も目につく、いちばん見えやすい場所にそいつは鎮座してゐるではないか。眼前に差し出されたカツ丼から視線を外してカツ丼を欲しがるような無駄な作業になんと出勤前の三〇分を費やしてしまったことになる。

二〇一八年一月二九日

ゲット。

大昔のことだ。四〇年以上前のことだ。僕とよしよしと一緒に暮らし始めたとき、越路吹雪のレコードを買った。どうして越路吹雪を買ったのか。理由はよく覚えていない。四畳半と六畳のプレハブのアパートだったから、とても音の通りがいい。一階のナガイさんはたぶん優雅な独身生活だったのだろう。いつもキャロルが繰り返しかかっていた。僕らはレコードを一枚得したようなものだったが、毎日キャロルを聴いていると五日は飽きが来るものだ。それでもナガイさんは飽きずに毎日聴いていた。

調べてみるとキャロルの活躍したのは二年半しかなくて、この年に解散しているんだ。ナガイさんはきっとそれが寂しくて毎日かけていたのかも知れない。

それに触発されたわけでもないのだろうが、越路吹雪のLPを僕たちは買ったのだ。どちらが買ってきたのかも記憶にない。チャーリー・パーカーやバド・パウエルなんかのほうが欲しかったけど、それは僕のわがままだったから、そんなものを買うわけにはいかなかったのだら

う。

越路吹雪を買ったんだけど、ナガイさんに負けないほど聴いたわけでもない。だからそんなに愛着があったわけでもないんだが、越路吹雪を持っているということで夢を見ることができたのかもしれない。

越路吹雪は五一歳。ののさんよりも若かったのだと思うけど、その頃すでに超ベテランの大歌手だった。でその時買ったのも、なにがしかのポリシーで編集されたLPではなく、「ベスト曲集」みたいなLPだったと思う。だからなじみのある曲ばかりだった。

いつしか、音楽の聴き方も変わった。我が家にはレコードは一枚もない。だからこのLPもどこかにやってしまったのだろう。最近やっている越路吹雪のドラマを録画して夜中に見ているのだが、むしように懐かしくなってきたのが越路吹雪の歌声。ということで今やCDと化した越路吹雪を購入したということだ。やはり、ほぼ聴き覚えのある越路吹雪だ。もちろん「越路吹雪ベスト」である。昔持っていたLPがCD化されたものなのか、今になって寄せ集めたベスト曲集なのかはわからない。でも越路吹雪に関していえばこれでいいのだ。名曲「幸福を売る男」ならぬ「幸福を売る女」越路吹雪だ。「 おいらバカボンド[♪]」幸せの歌を次々と歌ってくれば幸せになれるというものだ。

これでいいのだ。いや、それはバカボン！

二〇一八年一月三十一日

「やはり、相撲は本物を見なくちゃ。それはなんたって国技館でしょ。」

日馬富士の暴力事件があり、ニュースではさかんに事件の詳細が報じられていたある日曜の夜だった。人間ドックから静観したということもあって、久々に我が家でくつろいでいたときのことである。

「それでね、国技館のチケットをとろうと思うんだけど、あんた、いつなら行けるの？」

「んー、そうだな。」

手帳をめくってみるが、どの日も何かと用事が入っている。この歳になって、職場も変わり、時間ができるだろうと思ったら、想定外に忙しい日が続いている。

「えーと、そうか、この日はどうだろう」

初場所一五日のうち、その日しか日程はとれない。しかもせっかくの相撲だ、前相撲に出てくる大鵬の孫とも見たいものだし、そうなると二泊になる。なかなかそうは日程なんてとれるものではない。だからその一日は絶対にその一日なのであった。

「いいかい、こういうのがある。僕はその日仕事が終わって北九州空港に行く。夏の法事のことと同じだ。北九州空港からだ仕事帰りに行きやすい。君はバスで来るんだっけ？」

「あときは大雨で、交通機関がストップしたので大学はおやすみだったでしょ。それで渋滞

をおして車で行ったじゃない。」

そうだった。あの朝倉の豪雨で福岡県の一部では大災害となったときだ。朝起きたら朝倉地方で豪雨の被害が出ていて、県内の交通機関はほぼ麻痺していた。そして豪雨は北九州に向かっていた、とかなんとかいう状態だった。

僕は一限に講義があるので、それが終わったら北九州空港に行き、よしよしと落ち合う計画を立てていたのだが、その計画が雨で難しくなりそうだった。JRが止まっては、よしよしの移動手段がなくなってしまうからだ。

で、大学のHPを見たらなんと全面休講になっているではないか。

「よし、今から行くぞー」

一限目に間に合うように起きていたから、準備万端。よしよしもバタバタと化粧などして僕らの車で北九州空港に向かうことにしたのだ。四時間ほどかけて空港に辿り着き、なんとか間に合った。その間のことも書けば長くなるので、ここは話を元に戻そう。

「そう、あのとと同じさ。僕は仕事が終わったら北九州空港に行く、そこで君と落ち合う。

いいね、そうしたら翌朝一番から国技館に行ける。」

「じゃ、切符とるね」

よしよしは苦心して切符をとった。しかし、ほとんどの席は埋まっていて、とれたのは二階席であった。よしよしは膝が痛いので椅子席の方がいいので二階席にしたのだが、A席はダメ

だった。なんという相撲人気なのだろう。よしよしは、

「今回の事件でみんな相撲に関心を持ったんじゃないの」

と言うが、そうなんだろうか。

旅行担当の僕は北九州発の便と国技館近くのホテルの確保にとりかかった。こちらもなかなか手強くて、それでもパックなんかで両国のホテルの朝飯抜き喫煙可みたいなくぶん不本意な宿と一九・四〇北九州発の便を何とか確保した。

それから夜な夜な相撲の話をよしよしから聴くことになった。月刊大相撲と、大相撲名鑑みたいなのをよしよしは買い込んで録画したその日の取組を見ながら相撲情報をチェックしている。

「何も知らんで行ったってつまらんでしょ。ちゃんと勉強しておかないと。あんたもちょっと見とくといいよ」

そう言われてもこちらにはそれだけの時間的な余裕はない。まあ、夜ごとに聞かされるよしよしの話から耳学問と相成ったわけである。

そして初場所が始まった。な、何とかちあげを封じられた白鵬が休場となった。理由はどこぞが痛いということだったが、どう見ても張り手とかちあげを封じられたことによっていつものパターン通りの相撲が取れなくなったように素人目には見える。ついで勝てない稀勢の里も休場となった。

そんなある日の朝、飯を啜っていた僕によしよしがなんかいうのだ。

「実はね、だびのクラスでインフルエンザが流行ってて、あと一人か二人欠席が出たら学級閉鎖になるらしいんだ。」

「へええ、それはたいへんだ。」

「そしたらね、子どもたちのめんどろはなんとかしなくちゃならない。」

「そうだろうね。」

「だから、わたしは行くよ。」

「・・・」

「あんたはいつも家のことは何もしていないのだから、その日は孫の世話をしなさいな。どうせ休みは取っているんでしょ。」

「・・・」

で、その日から僕は朝起きたときと三度の食事と寝る前にお祈りをするようになった。

「だびのクラスのお友だちが健康でありますように、と」

無事週末となり、週末が明けても悪い噂はなかった。

が、しかし、またまた天災は我等を見放さなかった。史上最大の寒波とやらがインフルエンザを粉碎して襲来したのである。へ東京は大雪だ」というニュースが流れている。

一日が終わり、日が沈む前に戸畑の駅によしよしを迎えに行った。そこでよしよしを拾うと

北九州空港に向かってCX五を飛ばした。

空港に着くと一本早い便が少し遅れて待機していた。

「早いのに乗れるかも知れない。」

ちょっと心が揺れたが、慌てたくないし、夕食も摂りたいし、トイレにも行きたいというので、見送ることとして予定通りの便に乗ることにした。空港の案内では「条件付き」となっている。もし着陸できないときはどうか他の空港か、戻ってくるということだ。

メシを食った後、早めに保安検査場を潜って搭乗待合室にはいる。僕たちしかない。

正規の搭乗時間が近くなるとだいぶ人が集まってきたが、飛行機は「しばらく遅れます」から具体的に「〇〇時〇〇分になりそう」と出る。今後考えられることをいろいろ検討してみた。羽田からの交通機関は「いじょうぶだろうか、もし戻ってきたらどうしようか、とかなんとか」心配になってきて、ホテルにも電話を入れてみる。「もしかすると着かないかも・・・」って。〇〇時〇〇分になりそうの数字が遅く遅くに書き換えられていく。

やがて「欠航になりました」と出た。

嗚呼！なんてこった。

まずはカウンターへ。明日の便の確保をする。朝一ではなくて二番目の便を押さえる。空港

のそばのティンに電話をかける。

「二人んですけど空いてますか」

「空いてますよ、どんなのがいい？」

「ツインの禁煙」

「ありますよ」

「予約したいのですが、名前は・・・」

「いいですよ名乗らなくても、空室はいっぱいあるから」

そして、両国のホテルに今夜の宿泊はできない旨を伝える。そうしたら、パックなので代金の精算はパック会社と相談してくれ、と言われる。

と、緊急事態の事務処理をこなし、ティンに向かった。

（とりあえず、くたびれたのでここまで。続きは後ほど）

二〇一八年二月九日

今週だったか、先週だったか、同僚の〇教授が研究室を訪ねてきた。〇教授との関係で言えば事務的な案件はだいたい片づいたはずで、特に用はないはずだった。いや、数日前、〇教授は５階のトイレには「水流が悪いので長めに水を流してください」という貼紙があることに気づいて話していた。

多くの看護学科の教員は4階に研究室があり、看護学科で5階に研究室があるのは総合人間科学系の教員数人と僕だけである。5階は主として福祉学科の教員室であり、われわれは看護学科ではへ5階」という範疇でくくられている。

○教授が言うには4階のトイレにはそういう貼り紙はないということであった。そうしたら同じ5階のM教授は

「ウォシュレットがついているのは5階だけよ」

と言うので、ちょっと驚いた。そうしたらA教授が

「1階のトイレは会議の後にたいへんらしい」

と口を挟んだ。

「会議の日は他の棟にいる他学科の教員たちが押し寄せるわけで、使い勝手がちがうせいか、いろんなコトが起きているらしい」

「へええ、どんな？」

「某棟では用を足すと自動的に水が流れるらしくて、そこから来た教員は水を流さないらしい、とか」

なるほど、人間の習慣というのは恐ろしいものだ。しかし、そうなる・・・

○教授が話を戻した。

「5階もそうよ。水流の強さを知らない人が5階で用を足して、しばしばブツが遺っているこ

とがあったのであの貼り紙になったのね」

というところで会議が始まり、その日のその話題はうやむやになっていった。なので、○教授の突然の訪問はその話の蒸し返しかとちょっとたじろいだのだ。M教授の話だと5階をウォシュレットにしたのは僕の前任者だったらしい。そういうことなら4階のトイレ改善に協力することも吝かではない。そう心に決めると、すこし落ち着いた。

「突然で何ですが・・・」

たいていのことは突然だ。そうでなければ「例のことですが・・・」かな。おおよそ大学内の会話はこの2つのどちらかで始まる。

「なんでしょう？」

「実はお願いがありまして・・・」

「お願い？」

こいつはくせものだ。彼女に「お願い」と言われて断れるはずがない。特に貸し借りがあるわけではないが、やはり、「お願い」には弱いのだ。ただ、そういう動揺は隠して問い直す。

「えっ！お願いとはいったい？」

「先日、ちょっと話した件ですが・・・」

おっ、やはりトイレの改修か。

「2月のこのかはだいじょうぶですか」

「？」

「一応空けておいてもらったと思うのですが、どうでしょう」

ああ、そうだった。思い出した。トイレのことではない。何か学生の実習の時に患者役をやってくれということだった。なにげに聞き流したか、いや・・・デスクの上にあったスケジュール帳をとり、パラパラと開いた。僕はyPadというスケジュール帳を使っている。iPadと同じ大きさだということであるような名称としたりしく、開くと左側に予定表、右側には仕事の段取り表が書き込めるようになっていて自由度が高い。日付も自分で書き込めるので、半年にいったんずつ買い換えて比較的先の予定に堪えられるようにしている。だいたい年末になると翌年の予定を手帖に書き込むことが増えてくるし、手帖にはその余裕がないから書き込めない。しかし、これだとそこは金と暇さえ掛ければ自由に使える。僕はだいたい半年にしているが、3ヶ月に一度買い換えるなら常に花月左記までは予定が立つことになる。予定は立つことになる。

話が逸れた。

yPadを開くと確かにこの日には「初老患者」とのみ左端の空欄に書いてある。

「あ、初老患者の件でしたね、確保しています」

「それですね・・・」

とO教授は授業計画のプリントを差し出して説明を始めた。僕は気管支肺炎で入院した田中一

郎さんを演じることになる。

「田中さんは六四歳で男性、身長は一七二cm、体重は七〇kg・・・」

「体重はもう少しありますが・・・」

「はい、そこはサービスで。で病状はこれこれ」

と田中一郎氏の状態が具体的に語られたところで、要は田中氏のパジャマが汗で濡れたので、これを新しいものに着替えさせるということをさせるのだそう。おおよその説明をするとO教授は去って行った。

そして今日が来た。

予定の一四時に行くの実習室では僕の前の事例実習が行われていた。で、僕が行くとFさんが飛んできて、別室に案内し、そこにパジャマを持ってきてそれに着替えさせられた。それから点滴をそれらしく左腕に貼り付けて出番を待つ。まさに出番を待つ俳優の控え室のような感じだ。

少し時間があつた。田中一郎氏に関するプリントを読み返し、役作りを試みた。

隣室の雰囲気が変わった。どうやら出番らしい。Fさんが迎えに来た。

「さあ行くぞ！」と土俵に上がる朝青龍のように頬を叩こうとしたが点滴のチューブが邪魔をする。そうだ、患者だった。で、扉が開き、実習室に入ると、なんとということだ。実習室は卓球台が何台かおけるほど広い。真ん中にベッドが置いてある。そしてまわりに学生たちがいる。

思い出した。今年の一年生は逃げるのが少なくて一一六名だったか。定員より二六名も多く入ってしまったのだ。その一一六名がぐりと空いたベッドを取り囲んでいる。僕は端の方から点滴柱を握りしめて入室した。学生たちがどよめいた。僕の講義に出ている学生だろう、うれしそうに笑っている。ベッドまでは花道のようになっている。まるで大観衆の中の花道を土俵に向かう力士のように、いやベッドの形状からはリングに向かうレスラーという方が近いかもしれない。そんな感じで花道に群れる観客を振り払いながら、リングもといベッドに向かったのであった。

二〇一八年二月一二日

フジテレビ系列「京都殺人案内」がたまたま録画されていたので、斜めに見ながらパソコンに向かっているが、主演は橋爪功（七六）。現役の刑事役だ。この番組は「橋爪功主演！人気刑事ドラマが復活！」という触れ込みだ。前作は藤田まこと主演で一九七九年から二〇一〇年まで三二作つくられたそう。藤田まこと四六歳から七六歳まで演じた。で、藤田の死去によって、シリーズは終了したのだそう。で、復活したのだが、主人公音川音次郎は四六歳から復活するのではなく、藤田まことが亡くなった七六歳から始まるところがすごい。藤田まことを引き継ぐわけだ。

上司は平泉成（七三）。京都府警の定年はいくつなのだろう。疑っていると思われるのは心外で、京都府警の現職刑事が七六歳というのは嘘ではない。音川の娘は本上まなみ（四二）が演

じている。親子として不自然ではないばかりか、他府県警の現職警察官（六〇歳以下）の娘ではなかなか難しい年齢になる。京都府警ならではの家族構成になる。

まだいい。TBS系ドラマ「汚れた舌」を録画していた。しばらくそのままにしていたのを見てみた。すると登場人物はすごいラインアップだった。

飯島直子	四九	三六
松原智恵子	七三	六〇
牧瀬里穂	四六	二九
加藤浩次	四八	三九
森口瑤子	五一	三九
田中圭	三三	一九
藤竜也	七六	五七

登場人物の左側が俳優の実年齢、右側が役柄の年齢。うーん。俳優というのはいいい職業だなあ。

二〇一八年二月一三日

先日、ある葬儀に参列した。生憎の雨であった。街中の葬祭場ということで、駐車場を確保しようと早めに家を出、案の定、小一時間ほど早く到着した。傘を手に屋根付きの駐車場に車を止め、出ようとすると案内の職員の方が

「こちらからどうぞ」と裏口から入るように声をかけてくれた。裏口のドアには

〈恐れ入りますが御用の方は正面入口にお回りください。⇒〉

という貼紙があったので、躊躇っていると、くだんの職員は葬祭場らしく悲しげに微笑んで、「だいじょうぶ、こちらへどうぞ」

と裏口のドアを指示してくれた。僕は遠慮なく裏口から中に入った。もとい建築物は正面玄関から入るようにデザインされているので、初めての場所に裏口から入るとやや世界観が倒錯する。ドアを開けて中に入った瞬間に方向感覚が微妙なくなるいを見せた。受付らしきものが設置されたばかりのようで、まだ関係者以外はほとんど姿がない。かろうじて知人をみつけ、挨拶をする。

そうしたら手に傘を持ったままなことに気がついた。見まわすと右手のほうに来客用の傘立てがある。それが正面入口であることに気づいたがやはり報告感覚は少しずれていた。ともかく、その傘立てに傘を差し込んだ。差し込むときに傘を丸めてボタンで留めた。傘といってもコンビニで買ったビニール傘である。透明なよくある奴だが、大きめの七〇cmのものだ。ただ、

こういう傘はすくなくしてしまう。それで、マジックでやや大きめに、うーん、五cmくらいの大きさで

〈新谷〉

と書き、さらに

〈休呆堂〉

と書斎の名を書き記した。そうすればまちがって持って行かれることはない。と思つてのことだ。

葬儀が終わり、参列者がそろそろと正面入口から帰途に着く。

「傘をお間違えないようにお帰りください」

とアナウンスがある。傘を手取る人たちの何人かも「傘をまちがえないように」と呟きつつ、玄関を出て行く。僕もそのようなしようにしたが、なんと、傘がないのだ。

似たような傘を一つ一つ確かめていくがあのサインがない。〈新谷〉 五×一〇cm、〈休呆堂〉 五×一五cm。太めのマジックインクなのでけっこう目立つはずだ。傘を開いたときのその人の驚きはいかほどのものであろう。それに透明な傘の外側から内側に向かって書いているので、傘をたたんでいても、何か書いてあることはわかる。だからまちがえようのないはずなのに、その傘がないのだ。

「もしかしたら、どこかで傘を開いた人が気づいて戻ってくるかもしれぬ」

そう考えて、ちょうど傘立ての前に立ち止まっていた知人としほし話し込んでいた。しかし、車は出て行き、あたりは誰もいなくなったので、知人に別れを告げ、帰ることにした。傘は遂に戻っては来なかった。

おそらく、いつかどこかで、傘を開いたときのその人の顔を思い浮かべながら少し日の差してきた道を家路についた。〈新谷〉〈休呆堂〉の文字がデカデカと描かれた傘を広げて街中を歩く気分はどんなものだろう。自分でも恥ずかしくなりそうな書齋名である。それを思うと、まちがえた人をちょっとだけ許す気になった。

二〇一八年三月二日

昨日、教務のMさんから電話があり、五日の文科省行きには前回作った身分証を忘れないようにとのことであった。

「はて？」

記憶がない。そいつと最後に会ったのが、何時、何処であったのかが思い出せない。文科省に行くときに持っていた鞆の中だろうということは想像がつく。しかし、あれから二ヶ月近く経っているわけだ。鞆も何度か使用しているから、そのたびに出し入れしている。しかし、身分証だ。出し入れするしたら・・・うーむ、思い出せない。

形状は、とりあえず文科省用に作成してもらったのだが、写真入りで、ラミネートしていて、服に装着できるようになっていた、筈である。だからカードケースには詰め込めない。実際、なかった。

「何処に置いたっけか？」

頭の中をいろいろな可能性が飛び交うが杳として最後に見た場面が思い浮かばない。研究室のデスクもテーブルも棚も紙の山だ。ちょっと探してみたが、ありそうな気がないので、あきらめることとして休呆堂を探すことにした。その鞆は休呆堂のルーターの前に置いてある。そこで鞆類を持ち帰るときに中身の交換をしているので、そのあたりの行動様式を思い浮かべる。あるとすればスリット。しかし、何度か出し入れをしているのだが、そこにあるという記憶は曖昧だ。しかし、座卓の上とかに置いてある可能性は高い。座卓の上も最近書類等が増えてきて搜し物の宝庫になりつつある。

で、新月でつけ麺を吸ってから帰り、休呆堂の探索に取りかかることとした。新月は週一通うラーメン屋だ。つけ麺が秀逸でほぼ毎週行っている。2回は行かないことにしているから「ほぼ」というのはほぼ確実に1回は行っているということになる。なぜ2回行かないかという、ジジイがひとりで夕食につけ麺を食べに来るというのはどうにもみっともなく思える。そんな世間体を気にするような方ではないが、最近、外見の老人っぽさに不快感を感じてしまうのではないのだ。眼球という窓の内側はそう変わったつもりはない。窓から見えている外の風景

は歳月と共に変わっていく。内側にいる自分はそれを列車の車窓から見ている旅客のような気分であるから変化してつもりはないのだが、時折、鏡に映る自分の容貌に愕然とするのだ。まあ、毎日のように愕然とする機会はあるのだが、いまだになじめない。

そんなわけで店員の印象に残るジジイにはなりたくないなあ、という気持ちが多分に強いのだろう。だから常連になるのは気恥ずかしく思えて、目立たないようにしているし、服装もスーツにしたり、ジャケットにしたり、時には思い切りラフな格好をしたりだ、はたまた帽子もいろいろ取り替えて特定の印象が残らないように工夫してきた。それと、バイトがしばしば替わっているようなので顔は覚えられないと思うっていた。学生が教員の顔を覚えていても教員が学生の顔を覚えきれないのと同じだ。しかも大学とちがって、覚えようとする必要がバイト諸君にはあるはずがない。なにしろ、流行っている店だ。何百人も来る客の一人に過ぎない。そしていつも町嚙につけ麺の食べ方を説明してくれるので、僕も一見の客のような感じで時間を過ごしていた。

しかし、ある時支払いを済ませて店を出るとき調理場から

「いつもありがとうございます」

と声をかけられたのでちと焦った。一人なのでだいたいカウンターに座る。調理場はカウンターの前なのだが、対面と言うより壁は高く、調理人の顔はまず見ない。だが、調理人の立場からすれば、

「どんな奴がこれを喰うのだろう」

と関心を持つ気持ちはわかる。それが、「いつも・・・」という声を掛けることになったのであろう。

ところが二、三週ほど前のことである。カウンターに座るとバイト男子がつつと寄ってきて、

「いつものでよろしいですか。冷つけ麺大と御飯割り。」

耳を疑った。確かにいろいろ試したが、冷つけ麺が旨い。量は中だと少し物足りない。特大は凡人が食べるには多すぎる気がして、まだ頼んだことはない。暖かい麺で出てくる温つけ麺もあるが、テレビの健康番組でレジスタントスターチの効能を知らされたので、暖かいのには手を出していない。このつけ汁は熱々で、器に手を触れられないくらい熱い。それに冷水で締めた太麺がよく合うのだ。

辛口、激辛もあるが、驚くほど辛くないのでこっそりマイ唐辛子を投入すれば済むので、最近では冷つけ麺大に決めている。また、残ったつけ汁を御飯に掛けていただく御飯割りは余分なカロリーと思いつつ、味を覚えたらやらないわけにはいかない。それでもつけ汁が残るのでこれはスープ割りにしてもらう。

もちろんラーメン屋だから暖かいラーメンもある。こちらはスープがあっさりした魚介系、こってりした豚骨系、両者を合わせたハーフ＆ハーフがある。こちらの好みは豚骨に落ち着い

だが、ここしばらくはつけ麺に執心している。

で、バイト男子に自分が注文しようとしていたものをきっちり言われてしまったので、

「あ、はい！」

と即答するしかなかった。いつのまにか彼は僕のことを覚えてしまったのだ。難という責任感のあるバイト男子だろう。

それで、先週のことだ。ちょっと疲れていたのかもしれない。出てきたつけ麺の印象がちょっとちがう気がした。少し細い感じがする。一口啜ってみる。

「細いか？」

そんな気がするが、自信は持てない。この太さだったと言われればそうだと受けとめるしかない。訊いてみたいとは思うものの、

「このジジイ、惚けとんのか」

と思われたくもないから、来週もう一度確かめようと決意したわけである。来週また来て、細いと思ったらきつと細いのである。ということで週末が過ぎ、月曜は早い。火曜は研修日出勤せず、水曜日はダビの小学校の催しがあるので、年休を取った。そして金曜は飲み会が入っているので、木曜日しか行けないことになる。それで、朝からつけ麺胃にして夜を待っていたわけだ。

そんな事情があつて、新月を出ると車を飛ばして宗像に帰り、休呆堂に着いた。

まずは鞆の点検だ。この鞆はよしよしからプレゼントされたもので、スーツに合う代物だ。なので、前回の文科省行きの際はこいつを携えていった。普通の人にはリビングに使うだろう部屋のカウンターキッチン端っこの下にカラーボックスを置き、ルーターをセットしている。その手前の床にこの鞆がある。あらためてみるが予想通り何も入っていない。次いで普通の家なら食卓があるだろう場所には3段のカラーボックスを5つ背中合わせに置いて書棚にしている。4つのカラーボックスが2つずつ背中合わせで、部屋の中央に向かう側面にもう一つ幅広のボックスを置いて3面が書棚になるようにしている。当初はその上を食卓代わりにしていたが、今はもうそのようには使えなくなってしまった。その手前に運動用のマットを敷いて以前は腹筋とか腕立て伏せをしていたが、腰痛をこじらせて筋トレを休止してからはそこにいろいろなものが散財するようになった。鞆の類い、カメラ、新刊書、郵便物などである。で、そういった周辺の鞆類、散乱した床を探索する。

段ボール箱が1つ置いてあるが、それはNさんとFさんが密談に来たときに座卓の上にあつたものを放り込んだものである。その座卓はというと普通の家なら応接セットでも置いてある辺りにあり、書棚、段ボール箱、筋トレマット、座卓という配列になろうか。食事はマットの上に座布団を置き、座卓にディッシュを置いてする。尤も座卓の上にもいろいろ書類や本、モノ等が積まれ、数種類の唐辛子や胡椒、擂り胡麻、刻み海苔などの食事のお供も載っているで、30センチ四方くらいが食事のための場として空けられている。

座卓の周辺の床にも本や書類、郵便物などが積まれている。以前自宅で使われていたソファの片割れ1人分が部屋の端に置かれ、その前にホームセンターで入手した半透明の蓋付きケースが四段ほど積み上げてある。これは貴重な史料や古書の類いを保管するものであり、これも適当な小机みだいにして野球中継を見るときに選手名鑑を置いたりしている。

窓際には手作り（ホームセンターで購入した文具要抽斗の上に板を置いたもの。子どもたちが学校に上がる前に机として作ったもの）を置いてペンで書き物をするのに使っている。

これがいわば一般に言うリビングルームの配置になる。あ、書き忘れたが説明したのは部屋の中央部分のことで周辺はテレビ以外は書棚である。ペランダに出る引き戸も半間を残して後は書棚で塞いでいる。この中を丹念に一つ一つ積み上げてあるものをひっくり返し、探索したが見つからなかった。

次いで隣室を探す。こちらには執務用の文机があり、その上にはパソコンが鎮座している。場所を取る場所を椅子付のデスクは学生時代から持っていない。ひとり暮らしの時は炬燵が机だった。誰でもそうだろうが、結婚したときに済んだのも小さなアパートから始めたので、やはり場所を確保するために座り机を詠えた。故郷の桜の木だったと思うが、いい仕事をしている。北海道民芸家具、だったかな。今はどうなっているのだろう。

この机は窓に向けて置いてあり、季節には目の前が釣川の土手で桜並木になっているので花見には最高である。2階なのでちょうど土手の上の通行人と目線が合う。生活するには気にな

るかもしれないが、仕事をするには支障はない。

この部屋も床が全く見えない状態なので発掘作業をする。掘り返すたびに元の大学の書類なんかが出てくるので、見つけるたびに廃棄している、いや、廃棄しようと考えているし、時々廃棄もしている。

以上くまなく探したが、結局見つからなかった。しかも、探しているうちに、全国地方教育史学会のシンポジウムのためにといって送られてきた文書を他の仕事が終わったら見ようとその辺りに置いていたのが見当たらないことに気づき、それも探し始めた。しかし、これも見つからない。その間テレビでは県民ショーが内容の濃い北海道民大会をやっていた。それを斜めに見ながら

「ジンギスカンが喰いてえな、そうだボチボチまつじんの通販を頼もうか」
なんて思いつつ悲嘆に暮れ始めていた。

一抹の希望は自宅にある。これがまたたいへんなことで、ちょうど数日前まで内装工事をしたところである。2階にあった寝室を1階に降ろすのが目的で大改造をしたのである。このとき1階の元は客間だった部屋に着替え用の小さな筆箆があり、その上がちょうど使い勝手がいいので、帰宅するとポケットの中の小物を置いたり、アクセサリを置いたりしていた。外見には雑然としていてよしよしは好まないものであるが、こちらは便利に使っていた。しかし、この部屋を大改装しなくてはならないので、そういった小物類とまだ自宅内に残存している書籍

類を休呆堂に持っていくように命ぜられたのである。そして工事が始まる直前に段ボール箱に数箱書籍を詰め込んで休呆堂に移送した。小物類も適当な小籠があったのでそれに入れた・・・、ところまでは覚えていたが、そこからだ。いざ改修が終了し、新しい寝室に入ったところで小籠の中には財布、目薬、車の鍵、マイ唐辛子などが入っており、別の極小コンテナボックスにタイピンとかのアクセサリーが入っているのを見つけてそれぞれの場所に配置したが、提げ時計が2つ見当たらない。1つは父の遺品から見つけてきたもので、もう一つはインドで購入したものだ。どこにどうやったものか記憶がない。

やがてよしよしと言うには

「本を持っていたときに一緒に放り込んでたんじゃないの？」

そうかもしれない、そんな気がする。ということ、休呆堂でその時運んだ本の入った段ボール箱を探したが、そこには本しか入っていなかった。しかし、こういうものはいつかひょっこり出てくるもだ。と、最近は諦めるようになっていた。ところが、今回の件で、もしかしたら身分証も一緒にまとめたのかもしれない、と思いついた。すると提げ時計なんかをどこかに持っていくわけがない。引き算をすれば休呆堂がやはり妖しい。いや、身分証は鞆と共に移動したはずで、そっちは研究室かもしれん。

で、気持は朝早く出て研究室の探索をすることまずは決まった。

朝、目覚めると娘が起きている。出勤が早いので駅まで送ってもらうことにした。とりあえ

ず念のために休呆堂に立ち寄り、最後の足掻きをしてから出勤することにした。

休呆堂で一通り昨夜のおさらいを確認し、浴室に何かないか入ってみた。ここで入浴するときは何か読みながら入るので風呂の蓋の上にはいろいろ雑貨が置いてある。時計や身分証を持っていくわけではないのだが、念には念をとということだ。当然数冊の本と書見台しかない。戻ろうとして洗面所の前に段ボール箱が置かれているのを発見した。

「あー、今まで気づかなかったな」

とか何とかひとり呟いて中をあらためると、何と！文庫本なんかの下に提げ時計が2個入っているではないか。名刺の類いも入っていたので、身分証も！と期待したがこちらはなかった。しかし、あれだけ探していた時計が一分だけ立ち寄ってみた休呆堂でさりげなく発見したのは望外の喜びであった。失せ物はいつか発見される。そして大方ものをなくすのは自己責任なのだということもまたまたまちがいのないことである。今回もそれは証明された。

後は研究室の探索に賭けることになる。いくばくかの希望を胸に出動したのだった。